



「スズメバチ・駆除・蜂毒」

9月11日に岐阜県飛騨市で開催されたマラソン大会で、多くの参加者がスズメバチに刺されてニュースになった。

スズメバチの仲間には、オオスズメバチ、キイロスズメバチ、コガタスズメバチなどが含まれ、そのほとんどが校内に生育する。また校内では見かけないがヒメスズメバチ、モンズズメバチなどがこの仲間に含まれる。前者の幼虫はアシナガバチの幼虫を餌とし、後者の幼虫はセミを餌とする。したがって、モンズズメバチは春から秋にかけて連続してセミがいるような地域にしか生育できない。因みに、一般的にあまり知られていないようだが、スズメバチの仲間の親はベジタリアン（樹液をなめる。…でないとその細いウエストを食べ物が通らない…）である。他の昆虫の幼虫を捕えて「肉団子」をつくるのは、幼虫が肉食のためであり、自身が食べるためではない。巨大な上あごを持つのも、巣の素材となる樹皮の切り出しに必要なためである。

スズメバチの被害が出ると必ず駆除の話になる。スズメバチおよびその巣の駆除は自治体にもよるが、千葉県市川市の場合は消防局が請け負うため、その駆除件数で発生状況を知ることができる。ここからわかる面白い傾向は、11月の平均気温が12℃を超えると駆除件数が増え、下回っているときは駆除件数が低い、という事である。これが何に起因するかは究明中である。

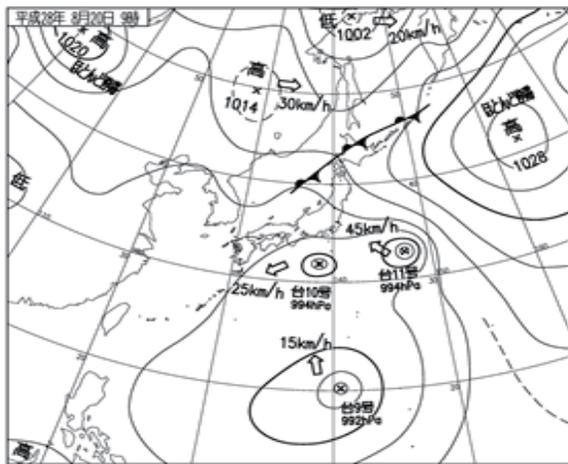
ところで、羽化して成虫になったばかりのスズメバチには毒がない（正しくは毒囊の中にまだ毒液が充てんされていない）。この個体は外に出ていっても攻撃・防御いずれの役にも立たない。したがって、羽化してから1~2週間程度は「内勤（会社でいうデスクワーク）」となる。つまり、巣の中で幼虫や女王のお世話をするのである。この間、毒囊の中には体液が再合成された毒液が溜まっていく。羽化して1~2週間後に、門番や巣の外壁づくりといった「外勤（会社でいう営業=外回り）」に変わっていくのである。

以前にも紹介したが、この毒液の成分はセロトニンやヒスタミンなどのアミン類や酵素、神経毒のブレンドで、対哺乳類に特化しているように見える。また、警戒ホルモンも含んでいるので、刺されると他の個体を呼び寄せる、という厄介な代物である。刺された場合は、その場から速やかに離れ、冷やして抗ヒスタミン剤を塗り、医療機関にかかるのが最善と言える。また、ハチ毒はタンパク質を含むため「アナフィラキシー・ショック」と呼ばれる急性アレルギー反応を引き起こしやすい。速やかな対処が必要となる。何よりもスズメバチは一度に注入する毒の量が、他のハチに比べて群を抜いて多いのである。

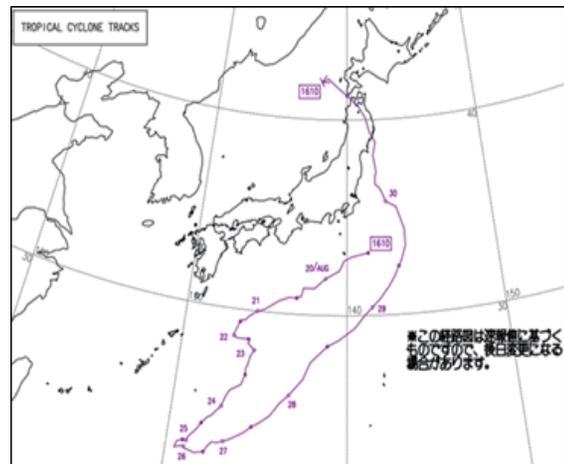
(Miyahashi)

2016年8月末、日本の南の海上に台風が3個、それも3つがまちまちの方向を向いて進む、奇妙な現象がありました。その中でも台風10号は特に奇妙で、進路図によると、八丈島の東でできた後、南西に進み沖縄の南方海上まで行くと、今度は引き返して北東に進み、最終的には東北地方に上陸し、東北地方・北海道地方に大雨を降らし日本海に抜け、温帯低気圧となり大陸で消滅しました。

天気図にある3つの台風を見ると、北から順に11号、10号、9号と並んでいます。よく考えてみると変な配置で、南の海上で発生した順に番号が付くのであれば、北の台風ほど古いはずですが、9号は緯度の低いところ(北緯18度付近)で発生しましたが、10号と11号はもっと緯度の高いところ(北緯33度付近)で発生しました(10号が発生した翌日に11号がその東に発生した)。



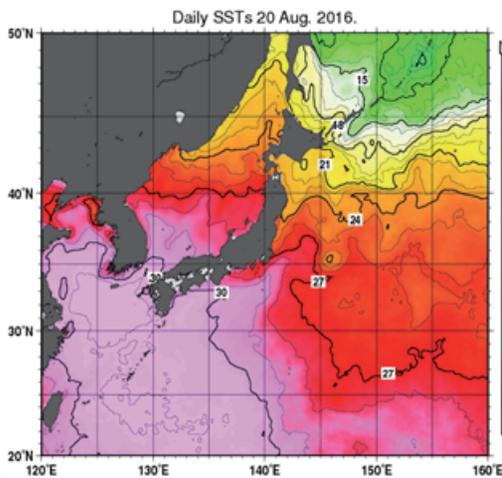
2016年8月20日の天気図



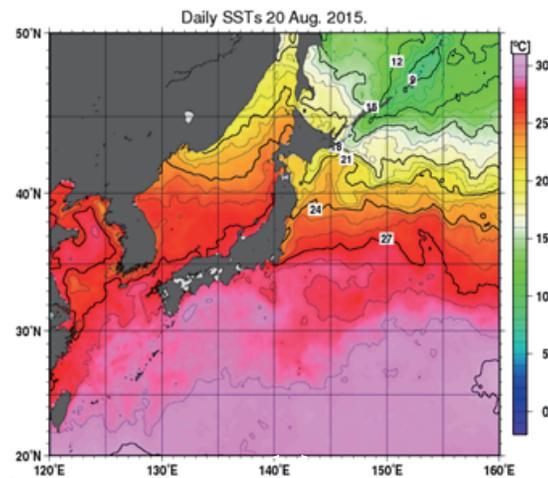
台風10号の進路図

下図(左)は8月20日、台風10号ができたときの海面水温(SST: sea surface temperature)です。台風は海面水温が26~27℃以上の海域で発生することが統計的にわかっています。よって台風は緯度の低い地域、およそ北緯5度~25度くらいの範囲で通常発生します。ところが今年前半が台風の到来が少なかった*からか、近海の海面水温が高く、関東のすぐ南まで27℃以上の海域が広がっていました。それも台風が進んでいった南西方面は30℃以上の海域が広がっており、台風はすくすくと成長しました。昨年(2015年)の同じ日の図(右)と比較するとわかりやすいですね。

*エルニーニョの翌年は台風が少ないことが統計的に知られており、今夏はエルニーニョが終わって最初のシーズンです。



【海面水温】 2016年8月20日



2015年8月20日

*カラー画像は気象庁HPから http://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/data/db/kaikyoy/daily/sst_HQ.html

台風が南西に進むことは非常に稀なことです。通常は太平洋の高気圧が日本付近に張り出し、その縁を回るように、日本の南で東から西へ、その後北上とともに徐々に東に進路を向けながら、最後は上空の偏西風に乗れ、速度を上げながら北東に進んでいきます。ところが8月末、太平洋の高気圧は日本の東に偏り、台風を誘導する風がなくなってしまいました。台風は言ってみれば趣くままに自由に進み、特に10号は南西に進んだところには、今年は30℃を超える高温(昨年は上の地図の範囲に30℃以上の海域はない!)であったために、大きく成長したというわけです。

9月になると、台風は例年のように南方で発生しはじめています。いま14号、15号、16号が日本のはるか南を進み、台湾から大陸方面に上陸するようです。今後、発生する台風がどうなるのか見守りましょう。

夏休み、諸君は出掛けたりする機会も多かったであろうか。私は、お役目としてがほとんどではあるが、毎週どこかへは出掛けているといった感じであった。志木の森、札幌合宿、フィンランド、国立科学博物館、水族館、etc…。そんな中から報告したいことは山ほどあるのだが、一昨年ぶりくらいに日本のペット事情のその後について書くことにした。

7月に実は、栃木県動物愛護指導センターに行く機会を得た。ここは数年前、ある事件でネットで騒がれた所でもあり、以前から行ってみたいと思っておりようやく実現した。収容犬、猫が何匹か檻にいて、譲渡者を探しており、実際に触れたり抱いたり出来、また終生飼いつけるといった飼い主のモラル、現在の犬猫の収容数、殺処分数などの状況を学ぶことが出来た。

環境省のデータを信じるならば、現在は犬猫の収容数は年間約15万匹、うち殺処分数は約10万匹。前回、この誌面で私が紹介した数の半数である。実際に、殺処分数はここ5年で半減しているようだ。これは収容動物の譲渡率が上がったことと、民間のNPOなどの里親探し、地域猫活動が活発になってきたことが大きいようだ。志木高近隣にもノラ猫が多いが、この夏、NPOがすごい勢いで去勢し、地域猫にしたらしく、線路沿いの団地、マンションで見かける猫はみな耳カットがされている（去勢した証）。広島や神奈川など、殺処分ゼロを達成した県もある。それは今までになかったよい傾向であるが、しかし、引き取らなければゼロだし、愛護団体が悲鳴をあげながら活動しているおかげだとしたら、これも問題である。そもそもたくさんのノラ犬ノラ猫を減らそうという事よりも、そうした動物を出さない事が大切である。それには、パピーミルなる儲けのみのためにブリーダーをしている悪質業者を取り締まらねばいけないし、そうした業者が商売できる環境を改善すること、つまりは誰でも安易にペットを手に入れ、飽きると捨てるといった飼い主のモラルを改善することが不可欠である。

フィンランド人も、日本人以上にペット好きらしく、散歩している人の多くが犬を連れていたが、どれも同じ犬種を見ないくらい様々であった。日本ではCMで人気があると同じ犬ばかりが売れていく。そもそもそんなところから日本は欧米とは違うのかもしれない。ドイツには殺処分は存在しないし、イギリスでも殺処分は病気など訳ありのものがせいぜい7千匹程度だという。日本でも、地震被害にもかかわらず殺処分ゼロを守ろうとする熊本市のような良い例もある。

「築地市場移転問題」で今は手いっぱいかもしれないが、2020年までに都の犬猫殺処分ゼロを公約に掲げた小池都知事にも、本当の意味での殺処分ゼロを目指してほしい。来週はそんな願いを込めて設けられた「動物愛護週間」である。志木高の諸君も、人間の身勝手さの犠牲になり殺されるはめになっても、飼い主を慕いつける動物たちが存在すること、動物愛護に関してかなり後進国である日本の現状など、この期間に少しでも考えて頂けたらと願う次第である。

(Izawa)

九月の俳句

Haiku

六月六日

胸元に湧きて出づるや秋の蝶

九月七日

早稲の香の押し寄せてくる新学期
爽やかや産まれたてなるバジルの葉
羽毛一片水に馴染まぬ残暑かな

九月一二日

萩の叢西に二センチづつ動く

今年は、一五日（木）が暦の上での中秋の名月にあたります。前日の月を待宵（一四日）と呼ぶほか、一六日は十六夜（いざよい）、一七日は立待（たちまち）、一八日は居待（いまち）、一九日は臥待（ふしまち）、二〇日は更待（ふけまち）と、だんだん月の出が遅くなりながら細っていく月を楽しみます。ちなみに、名月の当日、雲に隠れて月が見えないことを無月、雨が降ることを雨月と呼びます。四季の景物を代表するものとして「雪月花」という言葉がありますが、名月はそれだけ大切にされているのです。

(Maekita)

『葉陰に咲く花たち』

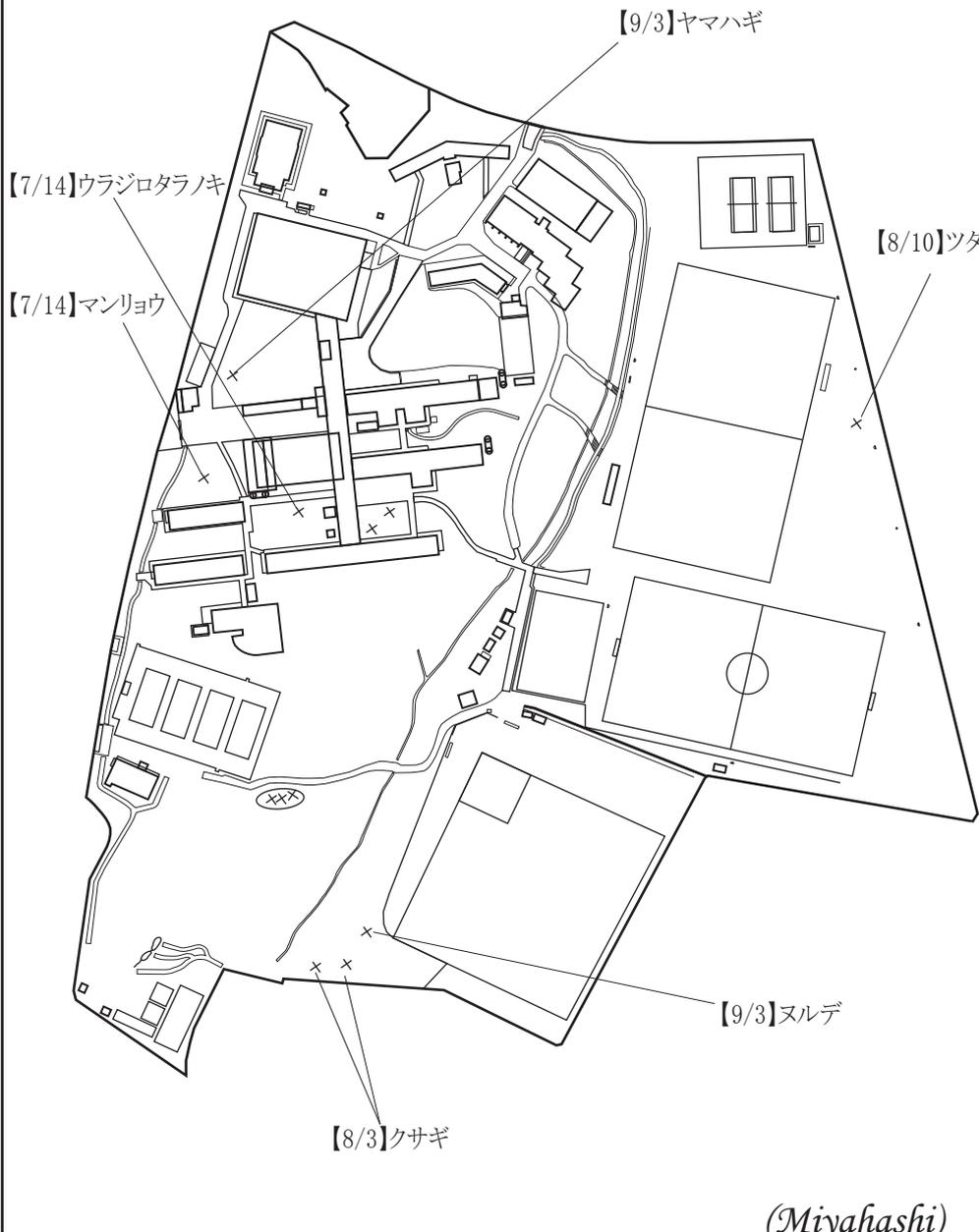
これから咲く花の中には葉陰に咲くものがある。モクセイ科の常緑樹で校内に良い香りをもたらす「キンモクセイ」は10月頃に葉の付け根にオレンジ色の小さな花を咲かせる。また、クスノキ科の常緑樹である「シロダモ」も11月頃にやはり葉の付け根にクリーム色の花を咲かせる。キンモクセイの芳香成分は多くの昆虫を遠ざけるが、ホソヒラタアブのみ例外という報告がある。という事は、このアブが他の個体へ花粉を運んでくれるキャリアなのである。

[2016年7月～2016年9月までの開花情報]

Grass

Wood

- 15. Jul. 2016 ヒナタイノコヅチ, キツネノマゴ,
オヒシバ, カラスウリ, ヤブラン,
ヤブミョウガ, ヤブマオ, ガガイモ,
ナルコビエ, オニユリ
- 15. Jul. 2016 ヒメムカシヨモギ, メヒシバ,
ミョウガ, ヨツバムグラ,
アオツツラフジ, ヤマノイモ
- 28. Jul. 2016 エノキグサ
- 3. Aug. 2016 ナツズイセン
- 10. Aug. 2016 ミチヤナギ, コニシキソウ, ガガイモ
- 3. Sep. 2016 ツルボ, アキノノゲシ, イヌガラシ,
ノブキ, オオアレチノギク,
メドハギ, キンエノコロクサ,
アキノエノコログサ



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	動物・環境	井澤 智浩 (Izawa)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	俳句	前北 馨 (Maekita)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	編集	荒巻 知子 (Aramaki)